

ノイエスだより

ノイエス朝日
(朝日印刷工業株式会社)群馬県前橋市元総社町73-5
TEL 027-255-3434
FAX 027-255-3435
https://www.neues-asahi.jp
Communication House
NEUES
ASAHI

十一月とはいえ暖かく、二十八度の夏日もありました。山々は戸惑ったようにところどころ紅葉があつたり、紅葉せずに枯れて散る葉もあり、人々も半袖だったり薄いダウンジャケットを着ている人もいたりチグハグしています。我が家は一応衣替えをしましたが、分厚いセーターなどはここ数年着ることもないので衣装ケースに仕舞ったままにしました。繊維の開発が進んだせいか、一年を通して着ることが出来る服も増えてきました。そのうち衣替えのやり方も変えなくてはと思っています。暖かくなつて良かったのは昔はナリのわらかったレモンがここ二、三年豊作だということ。今年はレモンで何を作りましょう。

そういえば、最近フランスで行われた世論調査で「気候変動を理由に、飛行機に乗る回数を生涯に四回まで」とする考えについて、四十一%が賛成と答えたそうです。実際にフランスでは、鉄道で二時間三十分以内で移動できる手段がある場合、国内線フライトを禁止する法律が今年の五月より施行されていて、特に若年層の間で飛行機よりも列車移動を推奨する人が多いようです。その生涯四回きりのフライトで行ってみたい国のベスト2に日本が入っていて嬉しな……、ということではなく、「生涯でそんなに遠くへ行かなくてもいいんじゃない？」と先進国の若者が思っていることに驚きました。ヨーロッパは陸続きで海外に行けるので海に囲まれた日本とは違うと思いますが、二酸化炭素排出対策のためというよりは、異国異文化を実際に体験してみたいと思う好奇心や冒険心のようなものが世界的に減ってきているのかなと感じてしまいます。もちろん身近な生活を大切に丁寧に生きることも重要だと思いますが、少し、近年はテレビでもスマホでも色々な情報を得ることはできますが、時間と金銭的に許されるならば世界中行きたい場所だらけの私としては一生にあと四回のフライト規制は淋しいです。自然にもお財布にも身体にも影響が少ないマツハな交通手段を是非開発してもらいたいものです。私は「温暖化を防ぐために新しい車に乗り換える」ことにも疑問を持っています。脱ガソリン社会、脱二酸化炭素排出というなら、新しい車を買う方がガソリン車を購入するよりも環境負担が大きいと思うのですが、コンピュターで制御されてちよつと壊れただけでも人の手では修理できない車はもはや電子機器ですね。昔の車の方がデザインも好きだし、音も匂いも実は嫌いではありません。カーボンニュートラルといって金銭で土ゼ口と解決することよりも、既存のものを大切に、人が修理しながら長く使うという方が共感できるし好ましいです。ともかく、世界にも未来にも憂うことはたくさんありますが、環境の変化に順応しながら実を付けるレモンの木のように、今をたくましく生きていかななくてはならないと思っています。(橋本)

ノイエス朝日〈展覧会〉のご案内

心あたたまる手仕事三人展 〈企画〉

金家秀男 斉藤かほる 瀬下充代

(絵画・陶) (七宝) (布・絲)

会期 十二月二日(土)～十日(日)

午前十時～午後五時(最終日は午後四時終了)

三人の分野が違う作家による普段身近に飾る七宝作品や楽しく使える心あたたまる器やバッグ、アクセサリーなどを展示販売いたします。

クリスマスやお正月のプレゼントに最適な品々も出品されますので、お誘いあわせの上お出かけください。

しらかわともこ 白川昌生展 〈企画〉

会期 十二月十六日(土)～二十四日(日)

午前十時～午後五時(最終日は午後四時終了)

手元にノイエス朝日で展覧会を実施したしらかわともこさんのフォトブックが三冊あります。二〇一四年に第一回、二〇一五年に第二回、そして第三回が二〇一六年に実施されました。二〇一三年十二月に六十六歳で逝去されて十年になります。

物静かにノイエスに来廊され優しい微笑みで話しかけてくれたのが、つい先日のことのようです。遺された作品には、ともこさんらしいシンプルな色彩や構図のなかに芯のある強さと独特の雰囲気を感じられます。

ここに以前、白川昌生氏が書かれた「しらかわともこ」について文章の抜粋を掲載させていただき故人の作品と再び向き合いたいと思います。白川昌生氏の作品と併せてご覧ください。なお、今回はフランス在住のともこさんのお姉さまの家族が来日し別紙の日時にヴァイオリンのコンサートを開催します。

白川智子(旧姓・小川智子)が作家として作品を発表したのは、一九七七年十一月二十五日に東京の江古田にあったギャラリイメールドでの「Runner of Process」がはじめてであったと思う。壁にとりつけられた無数のちり紙には「わたしは小川智子です」とタイプ打ちされており、顧客はこれを自由に手に取ることが許されている。この自己放棄ともみられる展示が彼女の自己主張とも重なっていくところに、ちり紙という消費物を活用している面白さがあり、会場の中でも注目を集めた作品であった。一九七八年一月にもギャラリイメールドでパフォーマンスを彼女はこなした。六月の片瀬海岸での「自然との対話」という波打ち際に小麦粉を振りまいていく、そのシンプルでプリミティブな感覚をストリートに打ち出した姿勢が、その後の彼女の作品制作の中でも貫かれた大きな柱となっていた。

そして十一年後の一九八八年に高崎のふかまち画廊での個展以降、作品を次々と発表していく。すでに一九七三年のノルマンディー滞在時期に作られた四十点のバステル画があるし、小学校から始めていた油絵の経験をもとに更に自由な表現へと向かって進んでいく。色紙を切つて構成していく作品、時に抽象的な形態、色表現の作品など、いずれも習作というレベルではなく一つひとつがシンプルだが特性を備えた作品になっていることに驚かされる。観るものの感覚へ直接的に訴えてくる強さがある。この率直でストリートな表現という点では、彼女は一九七三年のときにはすでに「ある完成された心の姿勢、感覚」を自己表現として確立していたといえる。

一九九〇年に六合村からおりて大胡に新居をかまえ、小さな制作場もでき、日々のなかで作品をつくる活動が十分可能になった。そして一九九九年に心臓手術をうけて長年の体調不良などの心配から解放された彼女は、赤のシリーズの作品を日々つくることに集中していった。一九九二年以来の色紙をつかったカラージュも、彼女の豊かな色彩感覚を感じると同時に、切り抜かれたさまざまな形によってあみだされる表現のおもしろさを感じられる。

二〇〇五年の高崎、少林山の「ブルーノアウトを讀んで」の展示では、彼女は初期に描いた油絵を展示した。

二〇〇七年に母が亡くなり(二〇〇〇年に父が亡くなっている)。彼女の中で大きな喪失感が生まれた。同時に二〇〇八年に乳がんの手術で左胸房を全部喪失することになった。こうした出来事の中、彼女は自らの死を予感しつつも最後の制作へとすすんでいく。しかし、すでに頸椎損傷のため右手、指先、筋肉が衰えはじめ字を書くこと、絵を描くことが次第に困難になっていった。そこで彼女は色紙を貼ることと作品をつくりはじめる。

二〇一三年に自宅のアトリエ二階に自分用の作品展示場をつくり、そこにデッサンと二つのインスタレーションを設置した。こうして彼女は自分の体力の衰え、癌が急速に進行していくなかで、最後の絵の作品シリーズを完成させていた。

六十六歳で亡くなるまで絵を描くことに喜びをみだし、七歳から描き続けた彼女の活動はどこまでも創造しつづける意志と喜びを喪失したことはなかった。回歸しながらも前に進んでいたのだ。

白川昌生